

海外便り

井村君江
(明星大学教授)

4月23日、ウィリアム・シェイクスピアの429回目の誕生日、ニューヨークのクラークソン大学で講演、エリザベス朝バンケットの催しが終わると、シラキュースから飛行機でニューヨーク。その夜ブロードウェイで、ミュージカル『キャッツ』を楽しむ。エネルギッシュな歌と踊りの華麗なスペクタクル。カーネギー・ホールでは小沢征爾指揮ニューヨーク・フィルの演奏、メトロポリタン・ミュージアムでは観世栄夫の能楽、日本公使館では和泉流の狂言が上演され、日本人芸術家の活躍が目ざましかった。五番街に程ちかい所に、OSCAR WILDE Memorial Bookshop と言う看板の店があるのを、車窓から見て驚く。ファン・ド・シェークル現象と思ったが、しかし Fairies 街であるとのこと。

ロンドンに帰って、懐かしい劇場街シャフツベリー・アヴェニューを歩く。『キャッツ』はもちろん『ファントム・オブ・ジ・オペラ』『スターライト・エクスプレス』最新作の『サンセット・ブルバード』など、アンドリュー・ロイド・ウェーバー作曲6本を含むミュージカル13本が上演されていた。ミュージカルの本場とされているブロードウェイのヒット・ミュージカルの大半は、このロンドンのウエスト・エンドで先に上演されている。最近ハリウッドのウォーク・オブ・フェームの石に、ウェーバーの名前がオリヴィエと共に刻まれたのは当然かも知れない。ギルバート&サリバンのサヴォイ・オペラを持つイギリスが、ミュージカルの源泉であるとは長年の拙論。学会で滞在したデンマークのコペンハーゲンでは、ナショナル・バレエとオペラ・コメデア・デル・アルテは観られたが、いわゆる劇作品の上演はなかった。やはり演劇の舞台の目は、イギリスのロンドンである。

5月の「ロンドン・シアター・ガイド」を開ける。バービカン、ナショナル・シアターでは、シェイクスピアの作品『マクベス』『ロミオとジュリエット』『お気に召すまま』『じゃじゃ馬馴らし』の上演が目白押し。本場ならではであるが、その中に今シーズン、オスカー・ワイルド劇が三本も上演中というのは、特筆すべきことであろう。*The Ideal Husband* (グローブ劇場)、*The Woman of No Importance* (RSC がバービカンからバーミンガム、ブリストルと巡業)、*The Importance of Being Earnest* (オールドヴィック劇場)。前の二作品は昨年すでに観たので、今回は Maggie Smith 主演で評判の高い、Nicholas Hytner 監督の *The Importance of Being Earnest* を観賞。当日は満席で、前日長時間並んで、グランド・サークル席でも手に入り幸いだった。これまでにこの

作品は何度も観てきたが、今回の場合、劇場のフォイエに集まった観客の間に、いつにない熱気が感じられた。

5月6日、舞台は期待を裏切らなかった。主な配役は Alex Jennings (Worthing), Richard Grant (Algernon), Susannah Harker (Gwendolen), Claire Shinner (Cecily), Margaret Tyzack (Prism) で、それぞれ好演。三角の孔雀の羽が舞台全体に広がって、庭の植え込みになっている斬新な舞台装置と、古風で上品な貴族の館の内装と落ち着いたコスチュームがあいまって、舞台全体に漂うヴィクトリア朝の上品な雰囲気。交わされる軽妙なウィットにみちた会話。観客は一つ一つの台詞を、笑いのうちに堪能している風であった。“It is exquisitely trivial, a delicate bubble of fancy, and it has its philosophy.” プログラムにはこの言葉が大きく出ている。ワイルドの劇中にその哲学を探せば、「人生のつまらないことは真面目に扱い、真面目なことはごく普通に扱うこと」となるのか。

Maggie Smith の Lady Bracknell は女らしさと気品を失わず、皮肉も嫌みや押し付けにならず、ヴィクトリア朝社交界の上流婦人が備えた、一種の見識ぶったポーズと表情を、生き生きと表現して素晴らしかった。Algernon は髪型と服装がどこか Wilde に似てラフィネされており、その演技のフライボワイヤントな感じは、社交界の Wilde はこうであったかと思わせた。「1890年の女性たちの憧れの名“アーネスト”は、1920年には古めかしく響いたかも知れないが、1992年にはかえて明るく響く」と監督の Hytner は言う。このワイルド劇流行の理由を考えると、ひとめぐりの世紀末への郷愁もあろうが、ワイルドのコメディ・オブ・マナーズ劇の風刺が、ユーモア好きのイギリス人の趣味に合っているからであろう。また逆説やパニングにくるんだ鋭い批判が、人間の真理について今日的であり、社会への不満解消のカタルシス役にもなっているからであろう。だが笑いがひとつも古くなく、しかも批判の盾先が日本の社会に向いていると考えても、一々思い当たるのである。Hytner はワイルドの劇作品の未来をこう予言する “There is surely sufficient warmth to last another hundred years.”

